子供部屋のシャツ

子供部屋のシャツ

昭和62年3月1日　第1刷

著　者　赤川次郎

発行者　西永達夫

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23
電話　東京03(265)1211(代)

定　価　680円
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社
万一、落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Jiroh Akagawa 1987　Printed in Japan

ISBN4-16-309450-4

恐怖ミステリー

子供部屋のシャツ

赤川次郎

文藝春秋

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

長篇恐怖推理「子供部屋のシャツ」／目次

割れた日　9
誘惑　114
拾われた娘　25
過去　134
逃げる足　45
子供部屋　156
閉ざした部屋　63
閉じる輪　171
星　79
閃光　197
大会議室　96
静寂　227

カバー・本文挿画　佐伯俊男

子供部屋のシャツ

割れた日

日が悪かったんだ。

――目的地へ着いてみて、三谷(みつや)はそう思った。

そうとでも考えないことには、やり切れない一日だったのだ。ゆうべは帰宅が午前二時だったというのに、今朝は六時に起きて、八時に事務所へやって来る依頼人との打合せの資料に目を通した。

大して金になりそうもない事件だったが、三谷は、客を選べるほどの実績のある弁護士ではない。どんな客でも、客は客だ。

その打合せが、思いの他長引いて、やっと昼ごろに済んでホッとしたのも束の間、近くのソバ屋で昼食を取っているところへ、電話がかかって来た。ついさっき、打合せを済ましたばか

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

りの依頼人が、結局、他にいい弁護士を見付けたので、話はなかったことにしてくれ、と言って来たのである。

ふざけるな、と怒鳴りつけたいのを、何とかこらえて、また何かありましたら、いつでも、と、言葉だけは愛想が良かったが、顔の方はひきつっていた。テレビ電話でなくて幸いだった。

腹が立ち、ムシャクシャして、難しい仕事に集中する気にはとてもなれない。結局、三谷は、大分前から放っておいた用事を片付けることにして、こうして出かけては来たのだが……。

熱気が、肌にまとわりつくような、残暑の一日だった。しおれ切った木の葉一枚を揺らすほどの風もない。

車が故障していて、電車で出かけたのが、また誤算だった。仕事柄、住所だけで、目的地を捜し当てるのは得意だったのだが、今度ばかりは完全に迷って、元来、あまり汗をかかない体質の三谷も、背中や首筋を流れ落ちる汗に、上衣を脱いで腕にかけ、次にはネクタイをゆるめて、ワイシャツのボタンを外して歩くはめになった。

しかも、歩いているのが、日陰一つない、安アパートや小さな古びた家がひしめき合う町並で、暑さを倍にも三倍にも感じさせる。

「すみませんが――」

と、三谷は、ついに諦めて、昔なつかしい手つきで水をまいている老婆に声をかけた。

「はあ？」
と、いぶかしげな目が三谷を見返す。
「この辺に、倉岡さんって家はありませんか」
「さあね」
老婆は、三谷のことを、押売りか何かかと思ったようで、ろくに考える様子も見せずに首を振った。
「四十くらいの女の方が一人で暮しておられると思うんですが」
三谷は諦めずに、「もしかしたら、アパートかもしれません」
と、付け加えた。
「知りませんよ。——水がかかるよ」
と、追い払いでもするかのように、水を打つ。
さすがに三谷もムッとして、そのまま何も言わずに行きかけたが——。
「ちょっと、あんた」
と、老婆が急に呼び止めた。
三谷が振り向くと、老婆は、
「今、倉岡って言ったかね？」

と、訊く。
「ええ。倉岡恭子さんとおっしゃるんですが……。ご存知ですか」
「倉岡って家はあるよ。恭子っていうのかどうかは知らないけどね」
「そうですか」
倉岡という姓は、そうどこにでもあるわけではない。おそらくそこに間違いないだろう。
三谷はホッとした。
「で、そのお宅は……」
「そこの小さな公園があるだろ。そこを通り抜けて、奥の露地を入るのさ」
なるほど、分りにくいわけだ。外側から見ただけでは、公園を通り抜けられるとは、とても思えないのである。
「いや、助かりました」
三谷は、少し禿げ上った額を——まだ三谷はやっと三十六歳だったが——汗を吸ってくしゃくしゃになったハンカチで拭って、礼を言った。「いくら捜しても、見付からなくてね。——ありがとうございました」
三谷が行きかけると、また老婆が言った。
「でもね、一人じゃないよ」

「え？」
と、三谷は振り返った。
「子供がね――男の子がいる」
「男の子？」
三谷は、驚いた。「じゃ、ご主人が倉岡というんですか」
それなら全くの人違いかもしれないのだ。
老婆は首を振って、それから言った。
「亭主はいないよ。誰が父親なのかも、よく分らないんじゃないかね」
その口調には、あからさまな軽蔑の調子があった。
「そうですか」
差し当り、その件は三谷には関係ない。
ただ、その女が、捜している倉岡恭子、当人なら、それでいいのである。
「ともかく、うかがってみますよ。どうも、ご親切に――」
「今日はやめた方がいいよ」
と、老婆が首を振る。
「というと？」

三谷は、戸惑った……。

――確かに、日が悪かったのだろうか。

その告別式は、異様なほど、人の姿がなかった。

古い家ではあったが、それだけではなく、荒れた、すさんだ印象の家だった。狭い玄関先から、十歳ぐらいの男の子の写真が、三谷を見下ろしている。

いや、見たところ十歳ぐらいだが、見るからに、どこか陰気な印象の男の子だった。ひ弱な感じで、しかもその眼差しには、疲れた大人のような暗い光が覗いていた。

読経している坊さんの他には、ただ一人、黒いワンピースの女が、じっと身じろぎもせずに座っているだけだ。

受付に立っている男は、この暑さに、うんざりしているのを隠そうともせず、上衣はとっくに脱いで、ネクタイをゆるめてしまっていたが、それでも三谷が近付いて行くと、あわててネクタイをしめ直して、立ち上った。

「どうも……」

三谷は、ちょっと会釈をして、「いや――実は、倉岡恭子さんにお目にかかろうと思って、やって来たんですが……」

「はあ。そうですか」

男の方は、気の抜けた声で、「あの座ってる女ですよ」
と、言った。
「どなたか、亡くなったんですか」
三谷は、低い声で訊いた。
「ここの子がね、男の子で——十歳でしたかね」
「そうですか」
三谷は、ちょっと迷ったが、まさか、ここで知らん顔をして、帰るわけにもいかない。
「そんなこととは知らなかったので——何の仕度もありませんが」
と、ともかく、上衣を着て、ネクタイをしめ直した。
「構わんですよ」
と、その受付の男は首を振った。「私も、この町内会の役員をしているので、仕方なしにやってるだけなんです。この母子のことは知らないんですよ」
「そうですか。——それにしても、寂しいお葬式ですね」
男は肩をすくめて、
「変り者ですからね。親も子も」
と言った。「ま、せっかくですから、お焼香でも」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com